



「santo」では京セラのブロワバキュームが大活躍。エントランスの床はもちろん、ほうきでは掃きにくい砂利の庭も、枯葉だけを吸い込む。ダストバッグが透明なので、捨て時がわかるのもありがたい。



## santoでも活躍、京セラのブロワバキューム

これまでは普通のほうきと穴あきタイプの塵取りを使って、砂利だけ穴から振り落とししていたのですが、これがなかなか大変で……。でもこのブロワバキュームなら石を拾わず、枯葉だけが集塵されるのでとても楽になりました。肩にバンドをかければ重さもまったく気になりません。

これ一台で吹き寄せ・吸い込み  
粉碎も可能な屋外用掃除機



「フライパンや家具を通してモノづくりの大切さを伝えていきたいので、興味をもたれた方はぜひsantoにいらしてください」と、案内してくれた店舗運営担当の竹内千晶さん。



吸い込んだ枯葉は約1/10に粉碎されてダストバッグに入る。



### ブロワバキュームRESV-1020V 価格2万7500円

ゴミの吸いこみと吹き寄せをレバーひとつで切り替えられる屋外用掃除機。風速はシーンに合わせてダイヤルで無段階に調節可能。ノズルの先端には、地面を這わせて使えるアジャスタブルローラーが付く。10m延長コード、大容量(30L)ダストバッグ、ワイドノズル、肩掛けバンド付き。重さ4kg。

ブロワバキューム  
RESV-1020Vの詳細は  
コチラから。



テック技術と伝統的な鍛造技術を組み合わせた独創的なツールやスツール、フライパンなどを生み出している。どれも高度な職人技が必要のため、高額にせざるを得ない。「最初は理解していただけない」と竹内さんは言うが、鍛造体験をすることで、その価値があることに充分納得してもらえそうだ。では、鍛造とはどんな作業なのか、次のページで見て行こう。



santo / 広島県福山市鞆町後地26-30 ☎084-983-5551  
◎11:00~18:00(月・火・水定休)



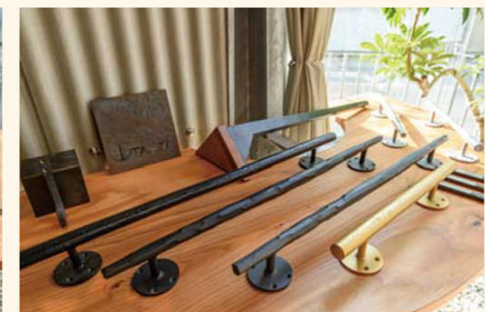
「santo」は地元福山の建築家・前田圭介さんが設計した。室内は自社ブランド「cocinero」や「TAONTA」の展示・販売と鍛造体験の待機スペースとなっている。造ったフライパンは中庭の暖炉で実際に試すことも可能だ。



## 鞆鍛冶の伝統を発信する 新スポット「santo」、福山に誕生。

現在では広島県の著名な観光地のひとつになっている鞆の浦は、かつては中国地方最大の港町として繁栄し、鞆鍛冶と呼ばれる鍛造技術が受け継がれてきた。しかし、時代の変化とともに鍛冶産業が衰退し、長い伝統が途絶えようとしていた。「santo」はこの灯を絶やさぬため、鞆の浦に誕生した鞆鍛冶の発信基地である。

写真 / 藪崎 大(WPP) 文 / モノ・マガジン編集部



さまざまな鉄製品をラインナップ。左は錨のオブジェ(価格7150円)、中は「cocinero」のフライパンと鍛造体験で自作できるフライパンやお香立て。右はドアノブ(オーダー品)。

現在、ここで取り組んでいるのが、自社の家具ブランド「TAONTA」(タオンタ)とアウトドア向け調理器具「cocinero」(コシネロ)の展示・販売、特注品などの受注相談、そして鍛造体験だ。前者は著名ブランドのOEMで培われた経験をもとに、ハイ

無骨な工場が建ち並ぶ町の中でひと際目を引くモダンな建物。格子状に組まれた屋根の軒下には暖炉やキッチンを設けた中庭のようなスペースがあり、その奥には四方をガラスに囲まれ、自然光の降り注ぐ明るい店舗が続く。ここは「モノづくりの価値を伝える。施設として、広島県福山市に誕生した「santo」である。

この施設の建つ鞆の浦は、古くから港町として栄え、江戸期には鞆鍛冶という技術によって、船や錨を製造・修繕する船大工の仕事場が軒を連ねていた。昭和40年代には鞆鉄工団地が建設され、周辺には80軒以上の鉄工所が集まっていた。しかし、機械化や後継者不足によって年々減少を続け、近年、伝統的な方法で錨を造り続ける工場はほとんど消えかけていた。この衰退を止め、鍛造技術を後世に引き継いでいこうと乗り出したのが、地元の金属加工会社・三暁の代表である早間寛将さんだ。2017年に廃業した老舗鉄工所の事業を三暁が引き継ぎ、工場が保有していた錨の伝統技術を世に発信するため、2022年8月、隣接する土地に「santo」をオープンさせた。

# 編集部Oがフライパン造りに挑戦



では、ものは試しということで、編集部Oがフライパン造りに挑戦。作業着に着替え、1000度以上に熱せられた鉄をハンマーで思い切りトンカントンカン。早間さんのアドバイスに従いながら表面に楕目（ハンマーの凹凸）を付けて成形していく。焼いて叩いてを十数回繰り返すうちに、徐々にそれらしい形になってきた。この作業、ストレス解消にもってこいかも！?



バリを取って滑らかに仕上げられた。最後に好きなアルファベットと数字を組み合わせた刻印が打たれ、世界にただひとつのフライパンが完成する。

グラインダーはフライパンの仕上げだけでなく、鋳のバリを取ったり、金型のキズを均したりと、さまざまな工程に使用します。なかでもこのディスクグラインダー(RG112)はグリップが細いので、とにかく細かい部分を仕上げるのに最適です。小回りが利くうえにパワーがあるのでハードな現場でも使えます。長時間の作業でも疲れませんね。



ディスクグラインダー RG112の詳細はコチラから。



鍛造の良さを知ってもらいたくて体験プランを始めたという早間寛将さん。「お客様は一度体験されると、鍛造の難しさに納得されます」



狭いところに最適なスリムギヤヘッドを搭載

**ディスクグラインダー(脱着式コード)RG112**  
 価格1万8590円  
 狭い部分にも入り込める、コンパクトで角の取れた丸いギヤヘッドと長時間作業でも疲れにくい握り径52mmの極細ボディ。脱着ができる電源コードは、複数の本体を1本のコードで使えて作業の効率化と現場の安全性・収納性も向上し、金属加工の現場で人気の1台だ。最大出力は980ワット。

「グリップが細くヘッドも小さいので細かい部分を仕上げるにはちょうどいいです。小さいのにパワーも充分あります」と早間さん。フライパンのみならず、鋳の仕上げや金型のキズ均しなど、さまざまな場面でこのグラインダーが活躍するという。鍛造という伝統的な作業は、最新の電動工具によって支えられていた。

鍛造は2017年に三暁が引き継いだ鉄工所(現在は三暁の第3工場)で行われる。内部は往時の設備を残しているため隣接する「santo」とは対照的で、使い込まれた鍛造機械が何台も並ぶ様子は壮観ですらある。

鋳や自社ブランドの鍛造を担当するのは、前の鉄工所時代から勤続する50代のベテランと20代のふたりの若手職人。彼らはチームを組んで、週に一回、この工場で集中的に鍛造作業を行い、それ以外の日には三暁本社で最新技術による金属加工業務を担っているという。

鍛造体験ができるスペースは、工場内の一面に設けられていた。ここで作業台に載った鉄板をハンマーで何度も叩きながら、楕目を付けていく工程が楽しめるのだ。実際に筆者もフライパンを叩いたが、これがなかなか面白く、時間を忘れるほど集中してしまった。楕目の具合に納得がいったところで体験作業は終了し、後はスタッフがグラインダーで仕上げれば完成する。ここで使われるのが、京セラの脱着式コードのディスクグラインダー「RG112」。



santoに隣接した工場では伝統的な鞆鍛冶の技術によって、鋳の鍛造が行われていた。赤く熱した鉄の棒を、大型プレス機で何度も叩いて延ばし、さらに熱した爪同士を鋲接(金属を合わせて叩き接合する技術)して、叩きながらグイッと曲げる。この作業を目の当たりにすれば、「TAonTA」や「cocinero」の製造がいかに大変な作業なのか、容易に想像できる。



鞆鍛冶によって完成した鍛造鋳。強度が高いため、現在でもこうした鋳にこだわる漁師は一定数いるとか。



1000度以上に熱した鉄を叩いて延ばし、鋳を造る鞆鍛冶の技術。この鍛造技術を応用して三暁の自社ブランドと鍛造体験プランの調理器具は生み出される。そして、これらの作業の最終工程を支えるのが、京セラの電動工具だ。

写真/飯崎大(WPP) 文/モノ・マガジン編集部

# 鋳の技術で生まれる鍛造家具と調理用品。それを支える京セラの電動工具